

雄弁家となるために（実践編）

文責：演練幹事

1 よい弁論とは

雄弁会で求められるのは、自らの理想の修練だけではない。己の理想をもとに人々の心を動かし社会変革を進めていくことである。民主主義社会においてより多くの人々の心を動かす必要があるのだ。つまり弁論の成否はどれだけ自らの当為を他者の心に響かせ、他者を実際に行動に導くことができたかである。いかにきれいな言葉を並べても完璧な論理を作り出そうと、人々を動かさねばそこには何の価値もないのである。

では弁論における重要な要素とはなにか。歴史上初めての民主主義国家、古代ギリシャのアテネにおいて、弁論に置ける説得術が学問的に体系付けられた。論理学（ロジック）と修辞学（レトリック）である。自らの当為の正当性を説明するために構築するのがロジックであり、レトリックとはその説得性を高めるための演出である。そして声調や態度といった側面もまた、説得性を高める上で効果があるという点で広義のレトリックといえるだろう。

今回の演練会議では、レトリック、声調・態度という側面から、古今東西、社会を動かした言葉から、説得のために必要な技術を考えてみたい。

2 チャップリン『独裁者』に見る、人の感情のひきつけ方

人々の心を焚きつけ、実際に行動を促していく方法とはいかなるものか。ここではチャップリンの傑作映画、『独裁者』のラストシーンのスピーチから考えてみたい。このスピーチにはさまざまなレトリックから構成されるだけでなく、声調・態度でも人々の心をひきつける要素が多く組み込まれている。

◎チャップリン 『独裁者』（1940） チャーリーの演説シーン抜粋

申し訳ないが、私は皇帝にはなりたくない。それは、私の仕事ではない。私は、誰も、支配したり、征服したりしたくない。私は、できることなら、ユダヤ人、ユダヤ人以外の人々、黒人、白人、あらゆる人々を助きたい。我々は、互いに助け合わなければならない。人間というのはそのようなものだ。人間は、互いの悲惨さではなく、互いの幸福をよりどころとして生きることを望むのだ。憎んだり、軽蔑したりすることを望んでいない。

この世界には、すべての人を受け入れる余地があるのだ。大地は豊かで、すべての人に衣食を与えることができる。人生は自由で、美しいものであるはずだ。しかし、その道を失った。どん欲が人間の魂を汚し、憎しみで世界を囲い、我々を悲惨と流血のまっただ中に行進させた。我々は、スピードを出す技術を開発したが、自分達を閉じこめてしまった。我々に富を与えてくれるはずの機械は不足をもたらした。

我々は知識を得たが、懐疑的な人間になった。賢くはなったが、気むずかしい、不親切

な人間となった。考えすぎるあまり、何も感じなくなった。機械より人間性が必要なのだ。賢さより人間性と優しさが必要なのだ。利口さよりは親切とやさしさを必要としているのだ。これらのものがなければ、人生は、暴力的になり、すべてが失われる。

飛行機やラジオは、私たちをより近づけた。これらの発明品の精神そのものを生かすには、人間の善良さが必要であり、人類の統一のために、普遍的友愛が必要なのだ。私の声は、世界じゅうの数百万の人々、絶望している男女、幼い子供達、人々を拷問し、罪なき人々を投獄している組織の犠牲者たちに届いているのだ。

私の声が届く人々に言おう。「絶望するな。私たちに、今、降りかかっている悲惨というものは、独裁者達の一時の仕業にすぎない。人間の進歩を恐れる彼等の憎しみにすぎない。やがて死ぬ人間の憎悪にすぎない。独裁者達はいつか死ぬ。彼らが人々から奪った権力は、人々に戻るのだ。独裁者達が死ぬかぎり、自由は決して滅びないであろう。」

兵士たちよ、野獣どもに身を捧げてはいけない。君たちを軽蔑し、奴隷にし、君たちの生活を統制し、どうすべきか、どう考えるべきか、どう思うべきかまで命令し、君たちを訓練し、食物を制限し、牛馬のように扱い、君たちを大砲のえじきにする連中のことだ。そんな冷酷極まるやつらに身を捧げるな！ 機械の頭と機械の心をもった機械人間には！

君たちは機械ではない！ 君たちは牛馬ではない！ 君たちは人間だ！ 君たちは心の中に人類愛を抱いているのだ。憎んではならない。愛されない者だけが憎しみを抱くのだ。愛されない者と冷酷な人間たちが。

兵士たちよ、奴隷制擁護のために戦うな！自由のために戦え！

「ルカ伝」の17章に、こう書かれてある。「神の国は、あなたがたのただ中にある。」ひとりの人、ひとつのグループの人々にあるのではなく、あらゆる人々にあるのだ。君たちにあるのだ。君たち民衆は、力をもっている。機械をつくり出す力、幸福をつくり出す力、君たち民衆は、この人生を自由に、そして美しくし、この人生をすばらしい冒険にする力をもっている。民主主義の名のもとに、その力を行使しようではないか。

団結しようではないか！ 新しい世界をつくるために戦おう。人々には働く機会を与え、若人には未来を、老人には保証を与えるような、すばらしい世界を！

これらのことを約束することによって、野獣たちは権力の座についた。しかし、彼らは嘘をついた。彼らはその約束を果たさない。彼らはこれからも決して果たさないだろう。独裁者は自分たちを自由にし、人々を奴隷にする。

さあ、その約束を果たすために戦おう。世界を解放するために戦おう。国家間の障壁を取りのぞくために。理性のある世界をつくるために戦おう。科学と進歩が、あらゆる人間の幸福をもたらす世界のために。兵士たちよ、民主主義の名において、みな団結しよう！

このチャップリンのスピーチは半世紀以上たった今もなぜわれわれの心に響くのだろう

か。まずは映像を見てわかるとおり、視線は常に前を向いており、聴衆に強く訴えかけている。声調も力強くかつ抑揚がはっきりしていて聴きやすい。さらに手を振り上げるといったボディランゲージも効果的に用いられている。

レトリックも優れている点が多い。レトリックのひとつである比喻として独裁者を「機械人間」「野獣」と表現することで独裁者の冷酷さを強く示している。また、「ユダヤ人、ユダヤ人以外の人々、黒人、白人、あらゆる人々」などという形で、類義累積という似た単語を連呼するという表現技法を用いることで文章が強調されている。

そしてこの演説は最後に「兵士たちよ、民主主義の名において、みな団結しよう！」という呼びかけ表現を用いている。その結果我々は演説に心を奪われ、自らの心に火をつけることができる。

このようによい演説はただのロジックの説明でなく、聴衆の心に火をつけ、行動を促すものでなくてはならない。そのためにレトリックが重要となるのである。

次の章からは具体的なレトリックのひとつであり、きわめてシンプルだが効果的な「反語的表現」を詳しく見ていこう。

3 シェークスピア『ジュリアス・シーザー』、ブルータスはなぜ窮地に陥ったか

◎シェークスピア『ジュリアス・シーザー』(岩波文芸文庫)

アントニウスによるシーザーへの追悼スピーチ

ここにわたしはブルータスの許可を得て、というのもブルータスは尊敬すべき人物であり、その同僚たちも尊敬すべきひとたちだから、シーザーの葬儀に際して一言いわせていただきたい、彼はわが友人であり 信頼すべき人物だったと。だがブルータスはいふ。シーザーには野心があったと。そしてそのブルータスは高潔な人物である

シーザーはローマに多くの捕虜を連れて帰り、その身代金で多くの人々の金庫が満たされた。このことが野心といえるだろうか？

シーザーは貧しいものの叫びに涙さえした。野心とはもっと冷酷なことをいうのではないだろうか。だがブルータスはいふ。シーザーには野心が会ったと。そしてそのブルータスは高潔な人間である

今期の演練助言方針は「反語的表現を用いた論点の明確化」である。では反語的表現とはなんだろうか。

反語的表現とは、実際の主張を疑問の形で示すが、実際には強い断定や皮肉を示す表現である。つまり「～だろうか。いや～ない。」という形で使われるレトリックである。

このレトリックが効果を発揮するのはどのような点であろうか。それは「聴衆を巻き込む」ことと「何を訴えたいのかわかりやすくすること」である。

先ほども書いたように、弁論は聴衆を巻き込み、行動を促すものでなければならない。逆にそうでないものは弁論としての価値はないに等しい。そして反語的表現を用いた際に

は「～だろうか」と聴衆に考えさせる余裕を与える。この余裕の間で聴衆は、自らの中で結論を作り、それと論旨が一緒だった際、聴衆は自らと弁士に対して強い肯定感を抱き、弁論に対して熱狂するのである。

さらに、聴衆に対して「～だろうか。～ではない。」と明確に示すことで弁士が何を訴えたいのか聴衆には明確になる。すると聴衆は弁論に入っていくやすくなり、「わかりやすい」弁論となるのである。

このように「反語的表現を用いた論点の明確化」は弁論における重要な要素である「聴衆を巻き込むこと」「わかりやすく伝えること」の二つを満たす、極めて重要なレトリックと言えるのである。

4 「お・も・て・な・し」、東京五輪招致はアジテートで勝負が決まった！

弁論において肝心なのは最初の1分である。最初の1分で聴衆の心をつかめた弁論とそうでない弁論とは大きな差が生じることとなる。

では最初の1分でよい印象を得るには何をすればよいのか。それは導入部分（アジテーション）で工夫することである。アジテーションとは訳の通り、聴衆を熱狂、扇動することであるが、このアジテーションで弁論の大勢は決まる。

それでは導入部分にはどのようなパターンがあるのか。それは三つのパターンである。

1つ目に「同情型」。つまり、悲惨な経験を聴衆に伝え、聴衆が野次や反論をできない心理状況にもっていくことだ。2つ目は「共感型」。誰もが理解できるエピソードや出来事を説明し、わかりやすさや熱狂を生み出すやり方である。そして最後に「パフォーマンス型」。突飛なパフォーマンスや変わった表現で相手が注意を向けざるを得ないようにする方法である。今回は具体例として一つ目のタイプと二つ目のタイプについて2014年のIOC総会における東京オリンピック招致スピーチを参考に見てみたい。一つ目はパラリンピアン佐藤真海選手。パラリンピアンになった経緯、被災の経験を最初に訴えることで聴衆の印象を強めている。二つ目の例としては安倍首相のスピーチである。本来国威のアピールになりがちであり面白味がないとされてきた招致国の首脳スピーチの中で自らの少年時代について説明するという異彩を放つものとなっている。少年時代のオリンピックに対する誰もが抱く憧れを素直に弁論に入れることで、話に入りやすくなっている。このようにアジテートは自らの特質（見た目、声、放つオーラ、論旨）によって工夫することで効果的に論旨を伝えやすくなるのである。

ただし、最後に注意すべきはアジテートを工夫するだけではだめということである。アジテートから本当に伝えたい論旨に無理なく展開させ、論旨も説得力あるものにして初めてアジテートはその効果を強く発揮するのである。

◎パラリンピアン佐藤真海による招致スピーチ ※ハフィントンポストより引用

19歳の時に私の人生は一変しました。私は陸上選手で、水泳もしていました。また、チ

アリーダーでもありました。そして、初めて足首に痛みを感じてからたった数週間のうちに、骨肉種により足を失ってしまいました。

もちろん、それは過酷なことで、絶望の淵に沈みました。でもそれは大学に戻り、陸上に取り組むまでのことでした。

私は目標を決め、それを越えることに喜びを感じ、新しい自信が生まれました。そして何より、私にとって大切なのは、私が持っているものであって、私が失ったものではないということを学びました。私はアテネと北京のパラリンピック大会に出場しました。スポーツの力に感動させられた私は、恵まれていると感じました。

2012年ロンドン大会も楽しみにしていました。しかし、2011年3月11日、津波が私の故郷の町を襲いました。6日もの間、私は自分の家族がまだ無事でいるかどうかわかりませんでした。そして家族を見つけ出したとき、自分の個人的な幸せなど、国民の深い悲しみとは比べものにもなりませんでした。

私はいろいろな学校からメッセージを集めて故郷に持ち帰り、私自身の経験を人々に話しました。食糧も持って行きました。ほかのアスリートたちも同じことをしました。私達はいっしょになってスポーツ活動を準備して、自信を取り戻すお手伝いをしました。

そのとき初めて、私はスポーツの真の力を目の当たりにしたのです。

新たな夢と笑顔を育む力。希望をもたらす力。人々を結びつける力。

◎安倍首相による招致スピーチ ※ハフィントンポストより引用

私が大学に入ったのは、1973年、そして始めたのが、アーチェリーでした。一体どうしてだったか、おわかりでしょうか。その前の年、ミュンヘンで、オリンピックの歴史では久方ぶりに、アーチェリーが、オリンピック競技として復活したということがあったのです。つまり私のオリンピックへの愛たるや、そのとき、すでに確固たるものだった。それが、窺えるわけであります。

いまでも、こうして目を瞑りますと、1964年東京大会開会式の情景が、まざまざと蘇ります。いっせいに放たれた、何千という鳩。紺碧の空高く、5つのジェット機が描いた五輪の輪。何もかも、わずか10歳だった私の、目を見張らせるものでした。

5 1960年米大統領選、ケネディ勝利の要因は質疑応答？

1960年の米大統領選は民主党の若き上院議員ジョン・F・ケネディと、共和党のベテランで副大統領も務めたリチャード・ニクソンの対決となった。選挙戦開始当初は若きケネディは頼りないとの世論からニクソンが堅実に支持を集めていた。

しかし第一回テレビ討論会（討論会のテレビ中継は史上初だった）で形成は一気に逆転する。ケネディは最終的に圧倒的リードのもと、大統領に選出される。

ではテレビ討論会の議論でケネディはニクソンを完全に論破したのだろうか。実は、ラジオで討論会を聞いた人（特に記者や評論家）はニクソンのほうが論旨が優れていると指

摘したのである。ではケネディとニクソンの違いは何だったのだろうか。

それは先日見てもらった質疑応答の様子である。記者の質問に対し、ケネディは前を向き、はきはきと、かつ短く答えているのである。一方のニクソンは答弁時間が長く、原稿を見ていて、どこか冗長な印象を受ける。この様子を目の当たりにしたアメリカ国民はケネディに対しより力強くリーダーシップがある印象を受けたのである。

この事実から言えることは質疑応答で重視されるのは、答えの内容より、その際の態度と言えるのである。まして質問時間が短い弁論大会の場合においては、より端的に質問に堂々と答え、次々とさばいていくほうが好印象である。質疑応答では誤ったこと（論理的矛盾、理念からのずれ）は言うてはいけませんが、完璧な答えをする必要はない。できるだけスマートにさばいていく、質疑応答はこのポイントに留意して進めていくことが重要であろう。

6 最後に

今回の演練会議では、レトリックの指導と同時に態度や声調についても指摘を行った。この心構えをもとに日頃の研究活動の成果を弁論で的確にかつ分かりやすく伝えることができる、聴衆の説得は容易である。

今後の成長に期待する。

参考文献

アリストテレス『弁論術』戸塚七郎訳（岩波文庫）

高杉尚孝『実践プレゼンテーションのセオリー』（NHK 出版）

佐藤信夫『レトリック感覚』（講談社学術文庫）

サイモン・マイヤー『スピーチの天才 100 人 達人に学ぶ人を動かす話し方』

（池村千秋訳 阪急コミュニケーションズ）

佐々木繁範『思いが伝わる、心が動く スピーチの教科書』（ダイヤモンド社）